

「ラストピース」

第
13

話

水
瀬
真
理
佳

へ登場人物一覧へ

鈴木理菜（18）（20）大学1年生

高橋湊（23）（24）理菜のパートの隣人

花村夏凜（18）理菜の親友

市川拓也（18）理菜の親友

飯田茜（19）理菜の元同級生

鈴木健一（41）理菜の育ての父

鈴木香澄（41）理菜の育ての母

白水透（45）（51）（54）バーのマスター

佐々木俊哉（45）ニュースサイトの編集長

塚目凜子（34）護身術の師範

竹内魁（20）（29）高橋の兄

高橋正雄（69）高橋の叔父

吾妻豊（55）長野県警の刑事

奈良坂壮一（35）長野県警の元刑事

山下春子（63）竹内の小学校の元担任

竹内早紀（40）高橋の母

阿部司（29）古諏訪夫婦殺害事件の真犯人

阿部宏樹（55）（58）理菜の主治医

○バー・外（夜）

高橋湊（23）、突然店を飛び出した

鈴木理菜（18）を心配して店の外に出てくる。

高橋「理菜？」

と、しゃがんでいる理菜の後ろから声をかける。

固まる理菜、咄嗟にスマホを隠す。

高橋「どうした？」

と、理菜の肩に手を置く。

理菜「何事もなかったように」ううん。なんでもない！」

と、高橋の手をやんわりどけて店に戻って行く。

高橋、理菜の異変を感じ取る。

○アパート・2階共用廊下（夜）

理菜と高橋がバイトから帰宅。

高橋が何か話しかけているが、理菜は誰かに尾行されていないか、監視され

ていなかを気にして聞こえていない。

高橋「理菜聞ってる？」

理菜がようやく我に返る。

理菜「えっ、あ、ごめん！ もう1回いい？」

高橋「明日は授業出れるから一緒に行こって話。3限からだよな」

理菜「うん。確か3限から」

高橋「じゃあ11..00頃ここ出て、どっかで昼食だよ。なに食べたい？」

理菜「なんだろ。。。考えとくね。じゃあ、お

やすみ！」

と、早々に部屋に入ろうとする。

まるで何か心配事があってそれどころ

ではないという雰囲気。

高橋がスマートフォンを付けている

理菜の左の腕を掴んで引き止める。

高橋「待った。何か話がある顔してる」

理菜の瞳が一瞬揺れる。

SNSに届いたメッセージを思い出す。

阿部司N「必ず1人で来ること。誰かに話し

たら、次はこの子かも」

理菜 M「もう誰も巻き込みたくない……！」

理菜「……ねえ湊くん」

高橋「ん？」

理菜「……ハグしてほしい。思いつきり、ぎゅーっと」

高橋、大きく息を吐いて、

高橋「そんなのいつでも大歓迎デス」

高橋が大きく腕を開くと、理菜はその胸に飛び込む。

高橋の腕の中にすっぽり抱きしめられる理菜。

高橋「前に理菜言ってくれたよな。1人で背負いこまないでって。それは理菜も一緒だから。」

理菜「ありがとう……私、湊くんのことちゃんと信じてるから」

高橋「うん」

そして意を決して高橋から離れる。

理菜「よし！　湊くんチャージ完了！」

高橋「なんかハグで色々誤魔化されてる気がする」

理菜、フツツと笑って、

理菜「そんなことないよ。本当にハグして欲しかったの」

しかし高橋は納得していない。

理菜は少し考えて、

理菜「……分かった。明日話すね。全部、明日」

高橋、渋々頷く。

高橋「明日は話すまで絶対離さないからな」

理菜「じゃあ話すのやめよっかな」

と、イタズラっぽく笑う。

高橋「（目を細めて）おい」

理菜「うそうそ冗談。ちゃんと話すよ！ 今度こそおやすみ」

と、気丈に部屋の中に入る。

○同・理菜の部屋（夜）

理菜、ドアを閉めて寄りかかる。

理菜、さつき届いたSNSのメッセージ
画面を見つめながら、
理菜「明日、全部終わらせる」

○花村家・リビング（朝）

テレビで竹内魁（29）の入院に関するニュースが流れている。

アナウンサー「9年前古諏訪で前田さん夫婦とその飼い犬を刺殺した事件で服役中の竹内魁受刑者が、昨日長野市内の病院に緊急搬送されたことが明らかになりました。詳しい病状は明らかにされていませんが、現在集中治療室で治療を受けているとの情報が入ってきています」

それを見た親友・花村夏凜（18）、
「ニュース見たよ！ 湊くんのお兄さん大丈夫なの？」と、理菜にメッセージを送るが、すぐには既読にならない。

○電車・車内（朝）

混みあつた電車の中、車内モニターに表示された竹内の入院の記事を読んでいる元同級生・飯田茜（19）。

茜 M 「何もたましてんの……！」

○アパート・高橋の部屋

高橋、ソファの上で目を覚ます。
カーテンの外はかなり明るくなって
いる。

スマートウォッチを見ると10..45。

高橋「やべ」

と、飛び起きて準備を始める。

○同・高橋の部屋の前

高橋「ごめん寝坊した！」

と、慌てて部屋から出てくるが、理菜
はいない。

しかし時間は11時を過ぎている。

高橋「理菜？」

と、理菜の部屋のドアをノックするが

返事はない。

呼び鈴を鳴らしても出てくる気配がない。

不安になった高橋、急いで自分の部屋に戻る。

○同・高橋の部屋のベランダ

高橋「理菜ごめん」

と、ひと言言って、蹴破り戸を思いっきり蹴る。

開いた穴から理菜の部屋のベランダに入ると、部屋は暗く中には誰もいない。

高橋、理菜がどこかへ行ったことを悟る。

急いで理菜に電話をかける。

高橋「頼む……！」

しかし呼び出し音が鳴り続けるだけ。

電話を切って今度は理菜の親友・市川

拓也（１８）に電話をする。

○三田大学・食堂

夏凜と腕を包帯で吊った市川がスマホで竹内の入院の記事を読んでいる。

夏凜「何か私たちに今できることないかな！？」

市川「そうだな……」

と、考えていると高橋から着信。

市川、電話に出る。

市川「もしもし。ニュース見たぞ。兄貴大丈夫なのか？」

高橋の声「焦った声で」あのさ、そこに理菜いる？」

市川「は、理菜？　いないけど」

夏凜「今日私たち3限からだからまだ来てないんだと思う。何かあった？」

高橋の声「家にもいないし連絡もつかないんだ。理菜が行きそうな所があれば教えてほしい」

夏凜と市川は目を合わせて顔色を変える。

夏凜「行きそうなところ、行きそうなところ……」
と、必死に考える。

市川「もしかしたら……阿部の家かもしれないな
い！」

夏凜「あ！」

高橋の声「阿部の家って？」

市川「実は……この前３人で理菜の主治医の
家に行ったんだ。阿部司と何か関係がある
かもしれないって理菜が言い出して」

高橋の声「それで？」

夏凜「私と拓也が家の中に入ったんだけど、

阿部司はいなくて」

市川「だけど多分、理菜の主治医は阿部司と
繋がってる。どこまで本当のことを知って
るかはわかんねえけど」

高橋の声「なんでそう思った？」

市川「理菜の主治医は、理菜が長野にいた時
からの付き合いなのは知ってるよな？ そ
の時通ってた阿部病院が、例の事件の１年
後に閉院してる。そのタイミングがどうも

引っかかって。だから俺と夏凜で調べよう
って話してたところだったんだ。俺が腕折っ
たから進んでないけど」

高橋の声「分かった。もし2人に理菜から連
絡あったら教えて」

と、電話を切ろうとするが、

夏凜「あ、待って湊くん！　　：　：　昨日理菜か
ら変な電話があってね、私は普通に自分の
家にいたのに『今すぐ走って大通り出て！』

ってすごく焦ってたの。まるで誰かに何か
を見せられてるような：　：　もしかしたらだ
けど、阿部司か、その関係者から何かコン
タクトがあったのかもしれない」

高橋の声「その可能性はあるな：　：　ありがと。

とりあえず理菜の主治医のところに行ってみ
る。素直に話すわけないだろうけど、今の
ところ居場所がはっきりしてるのはその医
者だけだし」

市川「じゃあ俺たちが病院の方に行くから、
湊は阿部の家に行ってほしい。すぐ住所送

る！」

高橋の声「ちょっと驚いて」分かった」

と、電話を切る。

夏凜も市川が「湊」と呼んだことにキ
ョトンとするが、当の本人・市川は何
も気づいていない。

市川「急ごう」

夏凜「うん！」

○信州総合医療センター・受付（朝）

T「2時間前」

理菜「竹内魁さんと面会したいんです」

受付「失礼ですがご関係は？」

理菜「関係、は、その……」

と、言葉に詰まる。

受付「申し訳ありませんがご家族以外の面会
は」

理菜「確かに家族ではないんですけど、ちゃ
んと関係者なんです！　ちよつとでいいか
らお願いします！」

と、頭を下げる。

ちよっとした騒ぎになり、警備員も近づいてくる。

その時後ろから高橋の叔父・高橋正雄（69）が声をかける。

高橋正雄「お嬢さんもしかしてあのバーにいた……」

理菜も高橋正雄のことを思い出す。

理菜「お久しぶりです。鈴木理菜です」

高橋正雄「りなさん1人か？」

理菜「あ、はい！ 湊くんの代わりに……」

高橋正雄「やや不思議そうに」そうか。なら一緒に行こう」

と、理菜を連れて入院病棟へ行く。

○同・集中治療室

ベッドが並ぶ部屋の中で端の1箇所だけカーテンが閉まり、その前には制服を着た2人の刑務官が繋いだ縄を持って立っている。

高橋正雄は刑務官に軽く頭を下げて、
カーテンの中に入る。

理菜もそれに続く。

中には人工呼吸器をつけて眠っている

竹内の姿。

シリンジポンプや心電図モニターなど
コードがたくさん繋がっている。

高橋正雄「魁。今日はもう1人見舞いに来て
くれたぞ」

理菜「はじめまして、って言うのもなんか変
な感じしますね。鈴木理菜です。急にすみ
ません。今日はどうしても伝えたいことが
あって来ました」

竹内「へ眠ったまま」

理菜「私たち、仲間がたくさん増えました。
湊くんにもスター、佐々木さん、凜子さん、
夏凜に拓也、茜ちゃん、山下先生、吾妻さ
んに奈良坂さん。それにきつと私のお父さ
んとお母さん、天国にいるパパ、ママ、ラ
リーも。みんな魁さんのことを信じて協力

してくれて、あと一步のところまで来てるんです。だからもう少しだけ時間をください。終わったら必ず湊くんと一緒に会いにきます」

もちろん竹内の反応はないが、心なしか穏やかな顔をしている。

○同・正面玄関

理菜と高橋正雄が出てくる。

理菜「今日は突然来てすみませんでした」

高橋正雄「いいや。遠いところわざわざあり

がとう。軽だから乗り心地は悪いだろうが、

東京まで送っていろいろ」

理菜「ありがとうございます……でもまだ行

かなきゃいけないところがあるんです」

高橋正雄「行かなきゃいけない所？」

理菜「はい。すみません、失礼します」

高橋正雄、何か言いたげに理菜を見送る。

まだ昼間にも関わらず、暗く分厚い雲

が空を覆って外は暗い。

○東京・阿部家・家の前

高橋、何度も呼び鈴を鳴らすが応答はなく、家のカーテンも閉まっていた中
の様子も分からない。

そして市川から「理菜の主治医、今日
は休みだって」とメッセージがくる。

高橋「家にもいない、職場にもいない……も
う完全に黒だな」

高橋 M「考えろ……俺が犯人なら理菜をどこ
に呼び出す？ どこに連れて行く？」

その時高橋正雄から着信。

高橋「もしもし」

高橋正雄の声「悪いな急に。今話せるか？」

高橋「どうした？ 魁のこと？」

高橋正雄の声「いや今日魁んところ行ったらな、
理菜さんが来たんだよ」

高橋「理菜が？ 長野の病院に？」

高橋正雄の声「ああ。俺もたまげたよ。お前

の代わりに来たって言って」

高橋「いや聞いてない……こっちはまさに今
理菜がどこに行ったか探してたところなんだ」

高橋正雄の声「やっぱりそうだったか……帰
り東京まで送るつつったんだけど、まだ行
かなきゃならんところがあるって行かせちま
った。すまん」

高橋「いや連絡くれて助かった。俺も今から
行く！」

高橋正雄との電話を切ってから、今度
はマスター・白水透（54）に電話を
かける。

高橋「マスター、俺今から古諏訪行ってきま
す！ 多分理菜がいるはずなんで」

白水の声「こっちは雪予報だから気をつけて
来るんだぞ」

高橋「……『こっち』？ え、マスター今ど
こにいますか？」

と、聞き返すが電話は既に切れてツ
ー音になる。

どういふことなのか混乱する高橋。

すると今度は編集長・佐々木俊哉へ4

5から着信。

高橋は閃いたような顔で電話に出ながらヘルメットをかぶる。

高橋「タイミングよすぎ！ 佐々木さんまだ

長野いますよね？」

佐々木の声「……え？ ああ、いるけど。ど

うかしたのか？」

高橋「理菜が一人で長野に行ってる。多分、

阿部司に呼び出されて」

佐々木の声「おいおいマズイなそれは」

高橋「呼び出された場所は分かんないけど、

とりあえず理菜の家があった所と、両親の

お墓に行つてほしいんです。もしかしたら

寄るかもしれない。俺も今からそっち向か

うんで」

佐々木の声「分かった。気をつけてこいよ。

こっちは今にも雪が降つてきそうだ」

高橋「それ、さっきマスターからも同じこと

言われた……」

佐々木の声「マスターと話したのか！？」

高橋「はい。『こっちは雪予報だから気を付けて来い』って。マスターと一緒にじゃないですよ？」

佐々木の声「いや、一緒じゃないが……」

と、歯切れが悪くなる。

高橋「そうだ、佐々木さんの話は？ 何か用があって電話くれたんですよ」

佐々木の声「……いや、いい。今はとにかく理菜ちゃんだ。何か分かったらすぐ連絡する」

高橋「はい、お願いします」

高橋、電話を切ってバイクのエンジンをかける。

○長野・大型ディスカウトショップ

店内にはノリのいい音楽が流れる。

理菜「すみません。スタンガンってありますか？」

店員「スタンガンはないですね」

理菜「じゃあ催涙スプレーとかは……」

店員「催涙スプレーもないですね。そういうのはネットか専門店しか取り扱いがないと思いますよ」

理菜「わかりました、ありがとうございます」

と、肩を落とす。

理菜M「大丈夫。戦いに行くわけじゃない、話に行くんだから」

と、自分を納得させて店を出る。

○霊園・入り口

看板には「霊園入り口」の矢印。

理菜を乗せたタクシーが1台、砂利の坂道を上っていく。

○同・駐車場

タクシーが停車。

理菜「ありがとうございます」
と、支払いをする。

タクシー「終わるまで待ってましようか？」
理菜「大丈夫です。このまま反対側を下りて
行きたい所があるんです」

タクシー「そろそろ雪んなるから、用事終わ
ったら早く帰った方がいいよお姉さん」
理菜「はい！ ありがとうございます」

タクシーは来た道に戻って行き、理菜
は墓地の方へ。

○同・墓地

小高い丘の上に並ぶ15ほどの墓石。
人は誰もいない。

眼下には諏訪湖と古諏訪町の街並みが
広がる。

理菜は「前田家之墓」の前で止まる。
持ってきた花を挿し、墓前でしゃがむ。
手を伸ばして墓石に触れるが、その手
は小さく震えている。

理菜M「パパ、ママ、ラリー。私、頑張るか
ら。どうか見守ってて」

と、祈る。

○山沿いの道と公園

人も車も通っていない道を歩き続ける
理菜。

錆びれた公園の前で足を止める。
裸の銀杏の木々に覆われた奥まった公園で、中にはたこの滑り台とブランコがある。

理菜「ここ……！」

理菜、公園の中に入り、たこの滑り台の上で体育座りをする。

理菜「懐かしいな……」
と、撫でる。

高橋の声「やっぱここにいた」

高橋の声が聞こえて周囲を見渡すが、公園には誰もいない。

理菜は幻聴が聞こえた自分に苦笑。
とうとう雪が降り始め、理菜は最後の目的地に向かうため公園を後にする。

○北諏訪小学校・前

廃墟と化した小学校。

立ち入り禁止のテープとロープは片方が切れて地面に落ち、意味をなしていない。

周りに人の気配はない。

しかし、誰もいるはずのない校舎から微かにピアノの音が聞こえてくる。理菜は覚悟を決めて校舎に足を踏み入れる。

○同・校舎内

校舎内に響く『ロンドン橋落ちた』のピアノの音を頼りに、薄暗い校舎内を進む理菜。

○同・音楽室

来る途中でピアノの音は止むが、ついに音楽室の前までたどり着いた理菜。固い引き戸を開けて中に入る。

部屋の中はストーブで温まっているが、誰もいない。

さらに奥に入ると、扉がバンと閉められる。

慌てて振り返ると立っていたのは阿部司（29）。

阿部司「よく来たね。どうだった？ 僕のピ
アノ。明日香先生にも聞こえてるかな？」

と、不気味な笑顔。

理菜は怒りで呼吸が荒くなる。

理菜「やっぱりアンタがママたちを……なん
で、理由は！？ ママたちがアンタに何か
した！？ なんの恨みがあつてあんなこと
……」

阿部司「アハハハッ」

と、手を叩きながら笑う。

理菜「答えて！」

阿部司「明日香先生たちに恨みなんてあるわ
けないじゃん。ぜーんぶ、君のせいだよ鈴
木理菜」

理菜「は……？ 私？」

阿部司「週に1回45分の、先生と僕のかけがえないピアノの時間。それがなくなっ
たんだ、君が生まれたせいで！ それを知
った時の僕の気持ち、分かる？僕は君に
居場所を奪われた！なのに、君はなんの
犠牲も払ってない。そんなのフェアじゃな
いだろう？僕はこの気持ちをどうすれば
いいかずっと考えた。そしたらある日、た
またま家の窓から君たち親子3人が歩く姿
を見て閃いたんだ。奪われたなら、奪い返
せばいいって。この苦しみを君にも感じて
もらおうって」

理菜はまるで理解できない思考回路に
首を横に振る。

理菜「そんなことのために……？」

阿部司「『そんなこと』かどうかは僕が決める。

君じゃない。ちゃんと動物で練習もしたん
だよ。痛みを感じる間もなく一瞬でやって
あげられるように。先生を苦しめたいわけ

じゃないからね」

理菜「痛みを感じさせる間もなく……？　床を血の海にして、あんなむごい姿にしてくせによくそんなこと……！」

阿部司「（気持ちよさそうに）ああそれはそう。僕も自分でやって驚いた。包丁がね、皮膚の薄い層を何枚も破って臓器を突き刺すあの感覚がたまらなくてき。止められなかった。あれはやみつきになるよ」

理菜は段々と気分が悪くなり、床に座り込む。

浅い呼吸をしながら、

理菜「先生は……阿部先生はアンタが犯した罪のこと知ってるの……？　家族なんですよ！？」

阿部司もピアノの椅子に座りながら、呼吸が浅い。

阿部司「ああ、生物学的には父親だよ。知らないわけではないじゃん。まあ、ずっと知らないフリはしてたけどね。自分の責任になっ

たら困るし。昔からそういう人、だから：
」

と、ピアノに寄りかかって意識を失う。
気分不良の原因がストーブだと気づいた理菜は、床を這って扉の方へ行くが、扉は固くてびくともしない。
その時、誰かが外から扉を開ける。

理菜M「みな、とくん……？」

理菜は朦朧とする意識の中で顔を上げる。

しかし立っていたのは高橋ではない。

理菜「マスター……？」

そこで意識を失う理菜。

○長野・霊園

佐々木が息を切らしながら墓石の間を進む。

佐々木「理菜ちゃん！」

「前田家之墓」の前に備えられた花を見て、

佐々木「ひと足遅かったか」

と、来た道に戻る。

○山沿いの道と公園

雪が降る中、バイクを走らせる高橋。
ある公園の前で急停止する。

裸の銀杏の木々に覆われた奥まった公園で、中にはたこの滑り台とブランコがある。

公園の中には誰もいない。

これ以上理菜を探す当てがなくなった

高橋は、たこの滑り台の上に座る。

高橋「理菜、どこにいったよ……」

その時、スマートフォンオッチの通知を見て、高橋は目を見開く。

○北諏訪小学校・屋上

気を失って寝転がされてる理菜、外気の冷たさで目を覚ます。

周りはいっすらと雪が積もり始め、

所々が白に変わっている。

阿部司は屋上を囲う錆びた柵にロープで縛られまだ気を失っている。

そして少し離れたところで白水が手足を縛られ、頭から血を流して倒れている。

理菜「マスター！」

と、駆け寄り、白水の頭部の出血箇所をハンカチで押さえる。

白水「理菜ちゃん良かった……無事か？」

理菜「私はなんとも。でも、なんでマスターがここに……？」

白水「俺は……随分前から知ってたからだ。

9年前、理菜ちゃんの家族を殺害したのが

阿部司だと」

理菜「何言ってるんですか……だって、え……？」

白水がゆっくりと語り出す。

白水「俺が魁の弁護を担当している間、魁の主張は一貫してた。『自分とはまるで違う

暮らしぶりをする家庭にどうしようもなく
憤りを感じ、言葉巧みに家に上がって襲っ
てしまった』と。まるで誰かに言われたま
まを話している、そんな印象だった。確か
に違和感があったが、本人が『やったかも
しれない』と自白している以上、俺にはど
うすることもできなかった。結局魁には無
期懲役の判決が下され、控訴もしないこと
になり、刑が確定した。ところが、だ―

○（白水の回想）拘置所・面会室

ガラス越しに向かい合う白水（45）
と竹内（20）。

白水「刑が確定した。これから君は移送され
ることになる。ご家族にも話してきたよ：
：弟の湊くんは、叔父の高橋正雄さんの養
子になるそうだ―

竹内「良かった：：ホッとしました。湊には
俺のことなんて忘れて、自分と関わらない
人生を生きてほしいから―

白水「そうか……他に気になることはない

か？ なければ私の役目はここまでだ。君

の弁護士としての契約は終わることになる」

竹内「じゃあ最後に。弁護士先生ではない、

„白水透“さんにお話してもいいですか？」

白水「へ戸惑いながら」ああ」

竹内「あの事件の日、包丁を持って前田さんの家から飛び出してきた阿部司とぶつかりました。同級生です。会うのは小学生ぶりだったけど、あれは間違いなく阿部だった。だから俺、本当は殺人なんてやってないんです」

それを聞いた瞬間、白水は勢いよく立ち上がり、パイプイスが大きな音を立ててひっくり返る。

白水「どうしてそれをもっと早く言わなかったんだ！！」

熱くなる白水に対し、竹内は至って冷静。

竹内「警察には話しました、でも相手にされ

なかった。だからいいんです。遺族の人に
は申し訳ないけど、もう終わったことだか
ら。俺はただ……最後に誰か1人でいいか
ら俺の話を信じてくれる人が欲しかった。
白水さん、俺の話を信じてくれますか？」
竹内の目には涙が滲んでいる。

（白水の回想終わり）

○北諏訪小学校・屋上

理菜、白水の話に絶句する。

白水「俺はすぐに阿部司のことを調べ始めた
なりふり構わず、手当たり次第に。だけど、
どうしても決定的な証拠が得られない、推
察の域を超えられない。そんな時、俺の事
務所は突然立ち退きを命じられた。土地も
物件も、全部阿部の息がかかってたんだ」
理菜「マスターが調べ回っていることに気づ
かれて……？」

白水「ああ。そこで俺は悟った。今さら過ぎ
たことを掘り返そうとしても、おそらく全

て手を回されている。警察をもコントロールしてしまいうような一族を仕留められるとすれば、チャンスは1回。阿部司がもう一度理菜ちゃんに接触してくる時だと思った。彼が身勝手な被害妄想で理菜ちゃんを恨んでいると踏んでいたから」

理菜「そこまで分かってたんですか？」

白水「これもあくまで推察でしかなかったけどね。それから俺も理菜ちゃんや阿部司の後を追って、東京に行った。全く関係ないバーを始め、表向きはもう諦めたと見せかけながら、その時を待ち続けた。そして3年前、広尾台で古諏訪と同様の事件が起こり、湊がバーにやってくる。湊があれこれ調べ始めれば、阿部側に勘付かれるのは時間の問題。最悪消されてもおかしくない。だから俺は一か八か、阿部司の父親に取引を持ちかけた」

○（白水の回想）総合病院・精神科・診察室

阿部宏樹（５５）の診察室のドアをノックする音。

阿部「どうぞ」

入ってきたのは患者ではなく白水（５１）。

阿部「どちら様でしょうか？」

白水「白水と申します。６年前、古諏訪夫婦殺害事件で竹内魁の弁護を担当していました。息子の司さんとは同級生だそうです」

阿部「さあ。息子の交友関係はあまり知らないのです」

白水「（本気のトーンで）その竹内の弟がうちに来た。真犯人を探すと言っている。そのうち鈴木理菜にも接触しに行くだろうな。かつての根回しに抜かりがないか、改めて確認しておいた方がいいですよ」

阿部、顔をひとつ変えず、

阿部「なんのことだかさっぱり」

白水「そうか。なら気にしないでくれ」と、あっさり帰ろうとする。

阿部「そんなことを言いになざわぎ？」

白水「そんなこと？ 事務所に続いて、せっかく軌道に乗ってきたバーまで潰されたらたまったもんじゃないからな。俺は無関係だということを伝えておきたかったまで。なんなら、アイツが事件のことに首突っ込まないようにコントロールしてやってんだ。礼を貰いたいぐらいだな」

阿部「……目的は？」

白水「金以外にあると思うか？」

阿部「フツ……まるでハイエナだな。分かった、乗ってやる。その代わり」

白水「弟の方は任せてもらって構わない。うまく攪乱する」

（白水の回想終わり）

○北諏訪小学校・屋上

白水「罪のない青年の人生を変えてしまった司法の過ちに関わった者として、俺には責任がある。だから、1回のチャンス逃す

わけにはいかなかったんだ。でも、こちらが不利にならない程度に情報を流していたのは事実だし、事件の資料も一部隠していた。何より、魁の口から阿部司の名前が出ていたことをみんなにずっと黙ってた。それで1人でどうにかしようとして、このザマだ―

理菜「マスターが悪いわけじゃない……もつと早く言ってくれてれば、1人で苦しむ必要なんてなかったのに！」

理菜は白水のロープを解こうとするがなかなか解けない。

阿部「9年待ち望んでそのザマか。最後の詰めが甘かったな―

と、理菜の主治医・阿部（58）が現れる。

しかし理菜は驚かない。

理菜「やっぱり……先生は息子の犯行だと全て知ってたんですね―

阿部『やっぱり』とはひどいなあ。9年も面

倒を見てあげた医者疑ってたなんて」

理菜「私は先生に事件のことを思い出せそうだと話しました。真犯人が別にいるとも、湊くんのお兄さんが冤罪だとも言ってます。それなのに先生は、私が真犯人を探しているとか分かってた」

阿部「なるほど。意外と鋭いね」

阿部は包丁を取り出しながら理菜に近づく。

白水「やめろ！」

理菜は立ち上がって警戒するが、阿部は理菜を刺すのではなく、包丁を差し出してくる。

阿部「理菜ちゃんにチャンスをあげよう」

理菜「チャンス？」

阿部「好きな方法を選ぶといい。これで司を滅多刺しにしたい？ お母さんたちがされたように。でもそれだと服に返り血がつくからあまりよろしくない。今あのロープを切れば、司は落ちる。それなら理菜ちゃん

は何も汚れずに済むよ。この高さから落ちたらまあ助からないだろうし、この分だと雪に埋もれてくれそうだ」

理菜「あなたの息子ですよ？　よくもそんなことが言える……」

阿部「こんなことになったのはアイツが原因なのは事実だ。ちゃんと責任は取らせないと。それが親の役目だよ。せっかくだから理菜ちゃんにやらせてあげようと思って。仇、討ちたいだろう？」

理菜「私はそんなことしない。彼には生きて罪を償ってもらいます」

阿部「ふふふ、あははははは」と、笑い出す。

理菜「何がおかしいんですか？」

阿部「刑務所に入ったらみんな罪を償うと思ってる？　そんなのフィクションだよ」

理菜「……」

阿部「コイツらはね、みんな病気、精神障害者なんだよ。反省や後悔なんて生まれない。

そんな、社会にいらない人間を生かしてお
く必要なんてないだろう？ 懲役何年だろ
うと死刑だろうと、刑務所に入れば司が生
きるも死ぬも、支えるのは理菜ちゃんたち
のお金だよ。それなのに、もし外に出てき
たら、どうせ司はまた同じことをする。理
菜ちゃんが今ここで終わらせないと、次に
死ぬのは香澄？ 健一？ 親友の夏凜ちゃ
ん？ 拓也くん？ それとも高橋湊かな？」

阿部の話し方は妙な説得力があり、考
えたこともなかった事実を突きつけら
れた理菜は混乱する。

白水「耳を貸しちゃダメだ」

しかし、白水の声は理菜に届いていな
い。

阿部「ここで終わらせよう？ どうせ素直に
司の言うことを聞いて、ここに來ることは
誰にも言っていないんだろ？ じゃあ大丈夫。
邪魔者はいない。誰も君を責めはしない」
理菜は握らされた包丁を持って阿部司

に近づく、阿部司が目覚ます。

しかし阿部司は驚いたり慌てたりする様子はなく、むしろ興奮している。

阿部司「俺がどうやって明日香先生たちを殺ったのか細かく説明しようか？」

その言葉で包丁を持つ理菜の手に力が籠る。

白水「理菜ちゃん、ダメだ！」

阿部司「ほら、早く！ お前もやってみろよ！」

と、興奮してバタバタする。

すると錆びれてもろくなっていた柵が外れ、阿部司も一緒に引っ張られる。

我に返った理菜は咄嗟に体が動き、包丁を放り投げ、阿部司に巻かれたロー

プを掴んでなんとか落下を止める。

しかし、理菜が落ちないように掴んだ柵も今にも壊れてしまいそう。

阿部は理菜たちの目の前に来て、落ちかけている2人を見下ろす。

理菜「お願い、私の手を引っ張って！」

阿部「どうして？ 親の仇を討つために真犯人を殺そうとするも、揉み合いの末2人も転落、そして死亡。悪くない筋書きだ」

理菜は阿部を睨みつける。

阿部は理菜が投げた包丁を拾い、

阿部「この指を一本ずつ切り落としていくのもいいね」

と、柵を掴む理菜の指に刃を当てる。

理菜M「まだダメ。あともう少し……時間を稼がなきゃ」

理菜「……そんなことできないくせに」

阿部「は？」

理菜「へ煽るように――あなたは、全部他人にやらせる。絶対に自分の手を汚すつもりなんてない。いや、できないの間違いか。断言するけど、あなたじゃ私を殺せない！」

阿部「この状況でそんなことが言えるなんて大したものだ」

理菜「自分の息子を病気だと言ってたけど、

だとしたら、それは間違いなくあなたからの遺伝に決まってる！」

阿部「はあ。残念ながら、理菜ちゃんの仮説は大外れだよ！」

まんまと煽られた阿部が理菜に包丁を振り下ろそうとしたところで、屋上の扉が開く。

飛び込んできた刑事・吾妻豊（55）が阿部の手に発砲。

阿部「ぐはっ……」

阿部は包丁を手放し、撃たれた手元を押さえる。

他にも元刑事・奈良坂壮一（35）、佐々木、師範・塚目凜子（34）、市川、夏凜、警察官たち、そして高橋が到着。

吾妻、拳銃を構えたまま、吾妻「彼女から離れろ！ 両手を頭の後ろにしてその場に伏せるんだ」

しかし阿部は吾妻の指示には従わず、

理菜が掴んでいる錆びた柵を掴む。

理菜「確かに私は素直に言うことを聞いて1人では来たけど、まさかそれだけで終わりにするわけない！ 9年間も私のこと見てきたくせに、本当に何も分かってないですね。大外れはそっち！」

と、さらに阿部を煽る。

阿部「クツ……！」

キレた阿部が、柵を掴んでいる理菜の手を思いつき蹴る。

理菜M「ヤバイ、もう……ダメッ……！」

寒さでほとんど感覚がなくなっている理菜は耐えきれずとうとう手を離してしまうが、間一髪で飛び出して来た高橋が理菜の手を掴む。

理菜「湊くん……！」

高橋「今引き上げるからな！」

そして後ろから夏凜と市川も加勢にくる。

夏凜「理菜！」

市川「理菜！」

理菜「2人とも！」

高橋を主軸にし、夏凜と市川も協力してなんとか理菜と阿部司は引き上げられる。

高橋「遅くなってごめん。よく頑張ったな」
理菜「このお守りがあったから。私、ちゃんとやれたかな……？」

と、スマートウォッチを見せる。

高橋「うん。十分すぎ」

高橋が理菜の後頭部に手を回し抱き寄せようとすると、阿部司がパチパチと手を叩く。

阿部司「めでたしめでたし。でも本当にいいの？俺を助けたこと、後悔するよ。次は誰にしようかな。今度は目の前で殺ってあげようか」

高橋、まだ減らず口を叩き続ける阿部司に馬乗りになり、阿部が落とした包丁を阿部司の首に当てる。

高橋「……黙れよゲス野郎」

高橋は抵抗せず不気味な笑みを浮かべる。

警察官「離れなさい！」

と、高橋に拳銃を向ける。

しかし高橋は動じない。

奈良坂「早まっちゃダメだ！」

白水「やめろ湊！！」

市川「落ち着け湊！」

周囲が高橋に呼びかけるが、高橋は阿部司の首に包丁を当てたまま阿部司を見下ろす。

高橋「……（呟くように）うるせえよ」

理菜「湊くん……？」

と、高橋に一步近づく。

高橋はまるで感情を失った人形のように、

高橋「なあ、理菜……コイツ、殺そうか？

多分これが最後のチャンスだ。今なら俺がコイツを殺してやれる」

高橋の真剣な問いに、理菜の瞳が揺れる。

高橋「コイツを殺しても、ご両親は生き返らないし、魁の時間も戻ってこない。でも生かしたところで、こんなやつが償うわけがない。結局法律なんかじゃ裁ききれないんだよ。コイツが言うように、いつか後悔するかもしれない！」

高橋の悲痛な訴えに涙を浮かべる理菜。

理菜と高橋のやりとりに耳を傾けながら、吾妻が静かに拳銃の撃鉄を起こす阿部司に壊された生活とそこから始まった新しい生活、辛かったこと、苦しかったこと、嬉しかったこと、楽しかったこと全てが重なり、胸がいっぱいになる理菜。

警察官が高橋に向かって銃を構え厳戒態勢に入っている中、吾妻は阿部司の頭を狙って銃を構え、トリガーに指をかける。

理菜「確かに後悔する日はくるかもしれない。

できることならママたちの痛みを分らせた
いって気持ちもあるし、例え反省されたと
しても赦すことなんてできない。だけど：
：どんな理由があっても、どんなに悪人で
も、人の命はそんな簡単に奪っていいもの
じゃない。それくらい命は重くて尊いもの
だって、私はそう思ってる。だから絶対に
ダメ。私は湊くんになんかことさせたくな
い。私のこと嫌ってもいい、恨んでもいい
から、お願い、その人を殺さないで：：」
と、涙を流しながら高橋の背中に身を
寄せ、包丁を持った高橋の手を下ろそ
うとする。

それでもしばらく手を下ろそうとはし
なかった高橋だが、唇を噛み締め、必
死に葛藤して、

高橋「：：分かった」

と、包丁を下ろす。

それと同時に、吾妻は起こした撃鉄を

元に戻しながら高橋たちの元へ行く。
「よく耐えた」と言うように高橋の肩
をトンとして、阿部司に手錠をかける。

吾妻「阿部司。お前を殺人の容疑で緊急逮捕
する」

その後ろで、阿部も現行犯逮捕され、
2人は警察官に連行されていく。
理菜は阿部司を殺してしまいたいほど
憎んでいる高橋の気持ちがよく分かる
ため、涙が止まらない。

理菜「（泣きながら）ごめん、ごめんね……
と、嗚咽を漏らしながら泣く。

高橋「いいんだ……ありがとう理菜」
と、理菜をしっかり抱きしめる。
そんな2人のやり取りを、ここへやつ
て来た面々がそれぞれ見つめる。

夏凜は市川と並んで、悲痛な表情を浮
かべながら、

夏凜「自分だったら、止められたかなって考
えちゃう……だって、当然の報いだよ。阿

部司はそれだけのことをしたんだから」

市川は静かに同意する。

市川「それでも理菜は……阿部司への怒りや憎しみ以上に、湊に人間として壊れてほしくなかったんだろうな……」

理菜たちから離れた吾妻は、奈良坂の方に戻る。

奈良坂の隣に並び、理菜たちを真っ直ぐ見つめて、

吾妻「……さっき、俺が阿部司を殺るつもりでいた」

奈良坂「え……？」

吾妻「本当に引き金を引く直前までいった。それがせめてもの俺の償いになると思って。阿部司がこのまま逮捕、起訴され、ムショに入ったとして、それがなんになる？ 阿部司に償う気がなければ、正直何もかも無駄、湊くんの言う通りだ」

奈良坂「先輩……」

吾妻「でも彼女の言葉にハッとさせられた。

俺が阿部司を殺すのは簡単だが、それは職務怠慢であり、ただの甘えだって。そんなことをしても、9年前の償いにはならないよな」

奈良坂「……当たり前です。そんなの俺が許しませんよ！？ あの2人の覚悟と決断が決して間違っていないことを、証明してください。それができるのは、警察官である先輩だけなんですから！」

吾妻「ふっ……その通りだ。お前は本当に今も昔も、刑事に向いてるよ」

吾妻からの不意打ちに、奈良坂は照れくさそうに喜びを噛み締める。

一方、白水の元には佐々木と凜子が駆け寄っている。

凜子「もうすぐ救急車来ますからね」

白水「俺は……」

と、全てを説明しようとするが、佐々木がそれを止める。

佐々木「反省と後悔はこれから一生かけてす

ればいい。本当の闘いはこれからですよ。
ここにいる俺ら大人全員、2人にあんなこ
とを言わせてしまった罪はデカイからな」

白水「……そうだな」

と、頷く。

そして涙がおさまった理菜は高橋に向
き合う。

理菜「お兄さんの所に報告しに行こう。湊く
んが来るの待ってるから」

高橋「うん」

○信州総合医療センター・個室（夜）

理菜、高橋、白水が部屋に通されると、
人工呼吸器をつけた竹内が眠っている。
まるで時間が止まっているかのように静
か。

全員、嫌な予感がする。

ベッドサイドには高橋正雄。

高橋正雄「お前が来たってことは、終わった
んだな」

高橋、頷いて、

高橋「阿部司は間違いなく起訴される。でもここからが本当の始まりかな。これから再審請求して、それが受理されて、やり直しの裁判で無罪判決が出て。ようやく魁の無実が証明される」

高橋正雄「（辛そうに）そうか……魁のことなんだがな、」

しかし、高橋正雄に話をさせないよう
に高橋が話し出す。

高橋「（気丈に）てことで、こっちはまだもーちよいかかりそうなんだわ。ごめん、魁。あとちよっとだけ待ってくれ。な？」

その時、竹内に繋がっている生体情報モニターが不快なアラーム音を鳴らす。人工呼吸器をつけていても酸素化が悪く、心拍が低下している。

医者が様子を見に来て、アラーム音を止める。

医者「呼吸と心拍が弱くなりました。み

なさん声をかけてあげてください。意識は
なくとも、耳は最後まで聞こえています」

高橋「は……？　弱くなってきましたってな
んだよ……それをどうにかすのが医者
の仕事だろ！？」

医者に詰め寄る高橋を白水が押さえる。

白水「心肺蘇生はしない、これは魁の希望だ」

高橋「なんでだよ……あとちょっとで、魁は
無実だって世間に証明できんのに……！

9年間、一番苦しんだお前がいなきや意味
ねーよ！」

と、叫ぶ。

高橋正雄「湊……！　もう、休ませてやろう」

と、涙を堪えながら言葉を搾り出す。

しかし、高橋はまだ受け入れられない。

高橋「分かった、俺が待たせすぎたから怒っ
てんだよな。それは、ほんとマジでごめん
って。出来の悪い弟で悪かったよ。でもな、
俺だっけとずっと待ってんだよ。まだオムラ
イス、食べさせてもらってねーぞ」

その時、竹内の手がピクリと動く。

その場にいる全員が反応する。

高橋「！？」

高橋の頭を撫でようとするように、震えながらもゆっくりと竹内の手が伸びてくる。

しかし、高橋がその手を握ろうとする
と、その手前で竹内の手は力無く床の方へだらんと垂れ下がる。

それと同時に再び生体情報モニターのアラームがけたたましく鳴る。

高橋「魁……？ 魁！」

と、竹内の手を握るが、その手にはもう力が入っていない。

高橋「なあ、頼むから目開けてくれよ！ 声

聞かせてくれよ！ 魁！」

竹内は安らかな顔で目を閉じたまま。

白水は悲壮な表情を浮かべ、高橋正雄は静かに涙を流す。

理菜は高橋たちから目を逸らし、口元

を手で覆いながら必死に声を殺して涙を流す。

高橋の泣き叫ぶ声と、「ピー」という無慈悲なモニター音が部屋の中に響く。

○裁判所・法廷

阿部司の公判。

傍聴席には理菜、高橋、白水、理菜の育ての両親・鈴木健一（41）と鈴木香澄（41）のほか、佐々木、凜子、市川、夏凜、茜、吾妻、奈良坂、元教員・山下春子（63）やその他の遺族、一般の傍聴希望者で満席。

理菜N「阿部司は古諏訪および都内で発生したあわせて3件の殺人事件についてあつさり犯行を認め、殺人の罪で起訴。日本中に再び激震が走ることとなった。また、古諏訪の件は警察組織の権威と信頼を揺るがした重大事件として、組織内外にも大きな波紋を広げている。ただ、全てを知っていた

はずの父・阿部宏樹は、積極的に犯行を助けた事実は確認されないとして刑事責任は問われず。阿部一族が各所に圧力をかけて隠蔽を図っていたことも、あくまで「疑い」にとどまった」

裁判長「もし今、それぞれの事件の前に戻れたらなら、どうしますか？」

阿部司「同じことをします」

と、斜め後ろの理菜の方を見る。

裁判長「また罪を犯すということですか？」

阿部司「はい。逆に教えてください。どうし

て人を殺すのは罪なんですか？」

理菜M「ああ、私は一体何を期待してたんだろう……こんな人間に、法の裁きなんて何の意味もない。やっぱりあの日、私の手で終わらせなきゃいけなかったんだ……」

理菜、膝の上で重ねていた自分の手に強く爪を立て、手の甲に赤い傷痕ができていく。

それに気づいた高橋が理菜の手を剥が

す。

まるで理菜の心を読んで「それは違う」と言っているよう。

そして高橋は剥がした理菜の手に指を絡め、「大丈夫」と言うように優しく、でもしっかり握る。

理菜、我に返る。

理菜 M「いや、違う……！　どんな裁きが下ったとしても、例えそれが死刑だったとしても、納得なんてできるわけない。だって、正しい選択なんて存在しないから。私はこうやって、時に後悔しながらも、あの時決めた自分の正義を信じて生きればいいんだ」

理菜、「ありがとう」と言うように高橋の手を握り返す。

T「1年後」

○アパート・高橋の部屋

高橋（24）、キッチンでミニサイズの

オムライスを作っている。
フライパンで火の通った卵の上に、ケ
チャップライスを乗せ、片側に卵を被
せる。

そして最後にフライパンを軽く動かし
てオムライスをひっくり返す。
やや歪な形で卵に少し茶色い焼き目も
付いているが、破けずに綺麗に巻けて
いる。

高橋はそれを皿に乗せ、リビングの簡
易的な仏壇の前に供える。

仏壇には母・竹内早紀（40）と竹内
の写真、骨壺が置かれている。

高橋「見た目はアレだけど、味は悪くないか
ら。理菜のお墨付き」

すると部屋の呼び鈴が鳴る。
やって来たのは理菜（20）。

高橋「いらっしやい」

理菜「お邪魔します」

理菜は持って来た花を仏壇の花瓶に挿

し、仏壇の前に高橋と並ぶ。

高橋「終わったよ、魁。やっと魁の無実が認められた。本当にお待たせ……すげえ時間かかったけど、俺、少しは弟らしいことできたかな……？」

と、視線を落とす。

理菜、高橋の頭に優しく手を置いて、
理菜「大丈夫。『最高の弟だ』って言うてくれてるよ、魁さんは」

高橋「……（照れ笑いしながら）だよな」

2人が見つめ合っていると、理菜の腹が「ぐうー」と鳴る。

理菜「（恥ずかしそうに）あ……」

と、腹を押さえる。

高橋、ブツと吹き出して、

高橋「せっかくいいこと言ってくれてたのに」

と、クスクス笑うが、今度は高橋も盛大に腹を鳴らす。

理菜、ニヤニヤしながら、

理菜「（わざと）あれ？　今何か聞こえた

ような？」

高橋「（澄まし顔で）俺じゃない……魁だよ。
多分、あれじゃあ少なすぎたんだと思う

……」

と、仏壇のオムライスを指さす。

言い訳をする高橋がおかしくて、ニヤ
ケが止まらない理菜。

理菜「じゃあ、もっと大きいの作ろっか」

高橋「うん……俺たちも食べれるくらい大き
いやつな」

理菜「ニコニコしながら）はいはい！」

と、高橋の手を引いてキッチンに連れ
て行く。

和気藹々と、幸せそうに並んで料理を
する理菜と高橋の後ろ姿。

（了）